

建文帝の諡号について (6)

Evaluating Ming Emperor Jianwen
from the Perspective of his Posthumous Title (6)

滝 野 邦 雄
Takino, Kunio

さらに、孫承澤（字は耳北、号は北海・退谷。順天府上林苑の人。崇禎四年辛未科（一六三一）三甲一百四十五名の進士。明・萬曆二十二年〔一五九四〕～清・康熙十五年〔一六七六〕）の『山書』には、沈胤培（浙江歸安の人。崇禎四年辛未科（一六三一）二甲二十六名の進士）の疏を載せる。

〔崇禎十五年（一六四二）〕十月、給事中の沈胤培 疏もて言う、竊かに駙馬都尉の鞏永固の一本を見、奉けたる旨に「該部の科に着して詳酌確議せよ」と。臣（沈胤培） 覺えず舉手加額（敬意を示す）して曰く、皇上（崇禎帝）の舊章を修明にし、^{くら}幽きとして^{あき}闡らかならざる無し。建文に此の日に諡せんことを請うは、眞に千載の一時なり。殆ど祖宗 ^{みちび}陰かに^{みちび}牖くの使言にして、我が皇上の繼述の善を成すなり（『山書』卷十六・「建文巨典」条・四百二十二頁・明末清初史料選刊・浙江古籍出版社一九八九年刊）。

そして、「按ずるに臣が祖の〔沈〕子木 通政使爲りし時、疏もて建文を祀らんことを請う。〔その〕大略に言う」（『山書』卷十六・「建文巨典」条・四百二十二頁・明末清初史料選刊・浙江古籍出版社一九八九年刊）として、本稿（1）⑦萬曆年間で検討した（『經濟理論』358号:23頁～27頁）沈子木の疏を要約する。

このように、崇禎年間になると建文帝に対する同情はかなり高かったようである。しかし、検討したように明一代を通じて、建文帝の名誉回復は、行われ

なかったのである。

ここで「⑧天啓年間」でふれた『致身録』について附記しておく。萬暦年間（一五七三年～一六二〇年）にあらわれた『致身録』は、かなり流行した書物であった。建文帝にたいする同情もあって、当時の江蘇の読書人の多くは、ここに述べられたことを信じた。そこで錢謙益（字は受之、号は牧齋、後に牧翁・蒙叟・絳雲老人・敬他老人・東澗老人。江南常熟の人。明・萬暦三十八年庚戌科（一六一〇）一甲三名の進士。明・萬暦十年〔一五八二〕～清・康熙三年〔一六六四〕）が、「致身録考」を書いて『致身録』が偽書であることを論証する。まず、錢謙益は、つぎのようにいう。

成化の間（一四六五年～一四八七年）、呉江の處士の史鑑明古（史鑑：字は明古、号は西村・日鑑堂・西史村人・西村先生。江蘇呉江の人。宣德九年〔一四三四〕～弘治九年〔一四九六〕）と長洲の呉文定公（呉寛：字は原博、号は匏翁・匏庵。江蘇長洲の人。宣德十年（一四三五）～弘治十七年（一五〇四）。成化八年壬辰科（一四七二）の狀元）友爲り。嘗て文定公に其の曾祖の諱は彬・字は仲質の墓に表せんことを請う。今、『匏菴集』中に載せる所の「清遠史府君墓表」是れなり。萬暦中（一五七三年～一六二〇年）、呉中に盛んに傳えらる『致身録』に、建文元年（一三九九年）、〔史〕彬 明經を以て翰林に徵入され侍書と爲る。壬午（建文四年）の事、從亡する者は三十二人。〔史〕彬も焉に與かる。〔史〕彬は後に數しば〔建文〕帝を滇・楚・蜀・浪穹に訪ぬ。〔建文〕帝も亦た間行し數しば〔史〕彬の家に至る、と稱さる。諸々の從亡する者は、氏名・踪跡 皆な考證す可し。前に金陵の焦修撰（焦竑：字は弱侯、号は澹園。南京旗手衛・江寧の人。嘉靖二十年（一五四一）～萬暦四十五年（一六二〇）。萬暦十七年己丑科（一五八九）の狀元）の序有りて、之を茅山の道書の中に得と謂う。好奇慕義の士 是の『致身録』を見るや、相い與に歎歎太息し、徬徨憑弔す。〔そ

して] 一は以て必ず有りと爲し、一は以て未だ必ずしも無しと爲す。南科臣（南京戸科給事中）の歐陽調律 其の書を朝に上つり、且つ爲に諡を請い祠を立て、方 [孝孺]・鐵 [鉉] 諸公の後なる者を附せんと欲す。余（錢謙益）「[清遠史府君] 墓表」暨び『[致身] 錄』を以て之を参考し、斷じて其の必ず無き者 十有り（『牧齋初學集』卷二十二・雜文二・「致身錄考」）。史鑑は、呉寛と友人であったので、曾祖にあたる史彬の墓表を書いてもらうようたのんだ。それが文集（『匏翁家藏集』卷七十）に収められた「清遠史府君墓表」である。ところが、萬暦年間になってひろく伝えられた『致身錄』のなかに、史彬が建文帝の逃亡にかかわったことが記されていた。この書物には、焦竑の序文があり、茅山（江蘇省の句容縣の東南にある山）の道書（道教の書物）のなかから見つかったといている。好事家はこの書をみておおいに嘆息し、この事実はあったといたり、なかったといたりした。歐陽調律が朝廷に提出し、ここに出てくる人たちの諡や祭祀を求めた。そこで、錢謙益は、「清遠史府君墓表」と『致身錄』とを考察し、絶対にこのことはなかったとして、十点を持ち出す。⁽¹⁾

(1) 錢謙益は、偽書である理由として、つぎの十点を指摘する。

- ① 「[清遠史府君墓] 表」に稱すらく、[史] 彬は幼きより跌宕不羈、國初に諸々の少年と貪縦の吏を縛り闕下に獻じ、賜食與鈔（食と金銭をあたえられる）され、舟を給され還る。恭謹に力田し、糧長と爲り、税入（徵稅收入）居最。毎に利害を條上し、罷行する所多し。郷人 たゞ之に頼る、と。是の如きのみ。[史] 彬をして果たして遜國の遺臣にして、縦從亡し主を訪ねせしむるも、諱忌する所多し。獨り「曾て先朝の辟召を受く」と云うは不當ならんや。即ち然らざれば、亦た一の老明經なり。其の生平の讀書續文、何を以て盡く没して書せざる。文定（呉寛）の「[清遠史府君墓] 表」 蓋し明古の行狀に據る。何ぞ實を失いて一に此に至らん。其の必ず無き者の一なり（『牧齋初學集』卷二十二・雜文二・「致身錄考」）。

「清遠史府君墓表」には、明の初期に貪吏を都に差し出し、褒美をもらった。農事に勤しみ、糧長となり、利害を申し出て、多く認められた。郷里のひとたちは、史彬を頼りとした、とのみ記されている。史彬がはたして建文帝の臣で、逃亡に同行したりしたならば、隠し事が多いはずである、なのに「建文帝に召しだされた」などというのは不適切ではないか。こうした人物でなければ、読書人であるだけだ。どうして「清遠史府君墓表」にそのことが書かれていないのだろうか。

② 「[清遠史府君墓]表」に稱すらく、[史] 彬は毎の治水の諸使の縣に行くに、縣官[史彬を]以て能くすと爲し、使の前に推して對せしめ、反覆辨論させれば、[史彬は] 畏れる所無し、と。[史] 彬は既に從亡の間に歸る。尙お敢えて印首伸眉して、諸々の父老を領して使者に抗論して前み、獨り人を畏れず物色するや。縣官 豈に耳無き者にして、獨り故の翰林侍書爲るを知らず、推使の前に推して對せしめる者ならんや。其の必ず無き者の二なり（『牧齋初學集』卷二十二・雜文二・「致身錄考」）。

「清遠史府君墓表」によると、治水対策に官僚が派遣されてくると、郷里の知県は、史彬に対応させた。この知県は、史彬の経歴を知らなかったのであろうか。

③ 「[清遠史府君墓]表」に、[史] 彬は生平 自ら吏を縛り闕に詣ると記すも、足跡は里閭を出でず。『[致身]錄』に其の間關として主を訪れ、廿年の間、海内を偏走すと録すると、何ぞ相い背かんや。洪熙の初め、奉けたる詔もて民間の廢田を籍報（帳簿に記して報告する）して、邑税若干石を減ず、と。『[致身]錄』を以て之を考えるに、[史] 彬 方に[建文]帝を滇南に訪れんとす。何の暇ありて之に及ばん。其の必ず無き者の三なり（『牧齋初學集』卷二十二・雜文二・「致身錄考」）。

「清遠史府君墓表」によると、史彬は郷里を出なかったようである。これと、二十年間にわたって逃亡に同行したという『致身錄』の記述とは矛盾する。

④ 「[清遠史府君墓]表」に言う、[史] 彬は然諾を重んじ（一度請けたことは必ず実行する）、事に遇いて利害を計らず、死に至るも悔いず、と。而して『[致身]錄』に云う、從亡を以て讎家の中る所と爲りて、獄に死す、と。[史] 彬 實は未だ曾て獄に死せず。從亡を以て獄に死すと云うは、其の詞を甚だしくして覬卹（あわれをさそう）するなり。「[清遠史府君墓]表」に其の卒するの日は宣德二年（一四二七）三月十日と書し、『[致身]錄』に後ること三日と云う。其の年 六十有二と書するも、『[致身]錄』に六十七と云う。卒するの年と日と皆な舛誤す。其の必ず無き者の四なり（『牧齋初學集』卷二十二・雜文二・「致身錄考」）。

「清遠史府君墓表」でいうところと史彬が仇に密告されて獄中で亡くなったということと異なる。また、亡くなった日と年齢も異なる。

⑤ 從亡徇志の臣、或いは生きては牧圉を扞る（『左傳』僖公二十八年に「不有行者，誰扞牧圉」）、或いは死しては草野に膏す（『漢書』蘇武傳）、或いは湮滅して淵沉す、或いは鳥集りて獸散ず。身家は漂蕩し、名跡は漫漶たり。安くんぞ晏坐して別に從容と題拂すと記して、某を補鍋匠と爲し、某を葛衣翁と爲し、某を東湖樵と爲す曰い、太學の標榜に比し、期門（官名。漢の武帝が設置。非公式の外出時の警護を司った）の會集に擬せんや。野史（『吾學編』建文遜國臣記・第六卷・「東湖樵夫」条）は「壬午七月、樵夫[永樂帝即位の]詔を聞き、自ら樂清の東湖に湛^{しづ}む」と記す、今、則ち[それを]以て從亡する牛景先と爲す。豈に湖に湛^{しづ}む者は一樵、從亡する者も又た一の樵ならんや。其の必ず無き者の五なり（『牧齋初學集』卷二十二・雜文二・「致身錄考」）。

建文帝の逃亡に付き添った人たちのことは、身を隠してわからなくなってしまうはずである。なのに、従臣に「補鍋匠」などのあだ名をあたえて、漢の武帝の護衛の集会などのようにしてしまっている。さらに、野史の記述とも矛盾がある。

- ⑥ 『[致身] 録』に[史] 彬 官に入るの後、諫めて官制を改むるを諫め、四年に堅守を請い、[徐] 増壽を誅せんことを請うことを載す。皆な建文の時政を剽竊し、[史] 彬の事を以て之を傳致するなり。然らざれば、何ぞ遼國の諸書は、一時の論諫 皆な詳しく載せるに、獨り[史] 彬に於いては之を削らんや。其の必ず無き者の六なり（『牧齋初學集』卷二十二・雜文二・「致身錄考」）。

『致身錄』には、史彬の建文帝に仕えてからの提案が記録されている。しかしこれは、ほかから持ち出してきたものである。そうでないのならば、建文帝についての書物に詳しくかかれてあってもいいはずである。これらの書物には、当時の政治上の議論はすべて記載されているからである。

- ⑦ 『[致身] 録』の後に、敷奏の記事有り。洪武二十四年八月廿五日、東湖の史仲彬^{ママ} 貪縦の官吏を縛り、上（太祖洪武帝）に奉天門に見え、酒饌・寶鈔を賜う。次日陛辭し、朱給事吉^{まみ} 祖（錢）して秦淮に之く。王文學彝・張待制羽・布衣解縉 詩を賦して贈り行く。而して給事^{はなむけ}中の黄鉞^ゆ 其の事を記す、と。按ずるに朱吉の墓記に、洪武二十三年に薦を辭して起きず。廿五年、明經能書の薦を以て中書に入り、詔勅を書す。二十七年、戸科給事中を授けらる。是の年、[朱] 吉 正に辭疾して里居し、尚お未だ官に入らず。何ぞ給事中と稱するを得て秦淮に祖錢せん。張羽は太常司丞と爲り、嶺南に謫せられ、道半ばにして召し還され、自ら龍江に沉む。此れ洪武の初年なり。王彝と魏觀・高啓とは同じく誅せらるは、洪武七年なり。解縉は[洪武] 二十三年に江西道監察御史に除せられ、旋いで放たれ歸る。是の年（洪武二十四年）は、解縉 朝に在らず、又た當に布衣と稱するべからざるなり。黄鉞は建文元年に宜章縣の典史を以て郷試に中（ごうかく）し、次年に胡廣の榜に中（ごうかく）し進士となりて、刑科給事中を授けらる。安くんぞ洪武中に先に給事に官たらん。是の『[致身] 録』を作る者は、[黃] 鉞の同郡の人にして、又た壬午（建文四年）に死するを以て、故に[黃] 鉞に假りて以て[史] 彬を重んず。[しかし] 其の踳駁（みだれる）なること是の若きなるを知らず。其の必ず無き者の七なり（『牧齋初學集』卷二十二・雜文二・「致身錄考」）。

『致身錄』には、洪武二十四年に、褒賞された史彬を餞別した人として朱吉・王彝・張羽・解縉・黄鉞が記録される。しかし、これらの人たちの活躍時期・官職などを見れば、史彬を餞別した事実はみとめられない。

- ⑧ 『[致身] 録』に云う、呉江の縣丞 [史] 彬の家に到り問う、建文君 在りや否や、と。[史] 彬 曰く、未だし、と。微晒して去る、と。當時、革除の奸黨を匿せば、罪 殊死に至る。何物の縣丞、敢えて[史] 彬の笑口を開くと相い向かうや。此れ郷里の小兒も解せざるの事語なり。其の必ず無き者の八なり（『牧齋初學集』卷二十二・雜文二・「致身錄考」）。

そして、問題点を指摘したあと、最後に、つぎのようにいう。

史〔彬〕の後人の諸生の〔史〕兆斗 改め録して『奇忠志』を爲り、援據すること多し。通人 之が序を爲り、以て家藏の秘本有り、〔江蘇句容県〕茅山に傳うる所の者と合すと爲すなり。去年、〔史〕兆斗 余（錢謙益）を過り、侍書の事の眞偽 何をか云うと問う。余（錢謙益）正に之に告げて曰く、偽なり、と。〔史〕兆斗 色動き、已にして曰う、先生の言 是なり、と。其の藏する所の秘本を問うに、則ち遜謝して有る無しとす。余（錢謙益）〔史鑑の〕『西邨集』「趙秉文畫跋考（僧巨然畫趙秉文跋考）」を觀るに云う、「世の偽りを爲す者は、幸いにして其れ淺陋不學なり、故に人 得て之を議す。其の稍や時世の先後にして、詞を飾り以て之を實

『致身錄』によると、呉江の知縣が史彬に建文帝のことを尋ねると、「未だし」といって微笑んで去ったという。しかし、建文帝にかかわった人をかくまうと死罪になる。どうして知縣がそのままにしたのか。子供でも分からないことである。

- ⑨ 明古（史鑑）の時に當り、革除の禁 少しく弛む。明古の友、呉文定（呉寛）より外、沈啓南・王濟之の輩 書を著わし革除を訟言すること多し。何ぞ獨り明古（史鑑）の祖を諱まん。明古（史鑑）は〔建文帝の臣であつた〕姚善・周是修・王觀の爲に傳を立つ。〔それらは〕具に『西邨集』中に在りて、大いに特書するも、一の避忌も無し。何ぞ獨り己の祖に於いて、諱み其の實を沒せんや。其の必ず無き者の九なり（『牧齋初學集』卷二十二・雜文二・「致身錄考」）。

成化（一四六五年～一四八七年）の時になると、建文帝に関する禁令は弛んできた。沈啓南・王濟之などは書物を書いてその禁令を非難した。また史鑑は建文帝の臣の姚善・周是修・王觀の伝記を書いたが、まったく忌避したところがない。なのに史鑑が自分の祖先の史彬だけを諱んだのだろうか。

- ⑩ 鄭端簡（鄭曉）は、〔建文帝に従つたとされる〕梁田玉等九人を〔『吾學編』建文遜國臣記・第六卷に〕載せ、松陽の王詔 之を治平寺の轉藏の上に得とす（『吾學編』建文遜國臣記・第六卷・「某部郎中梁玉田」条）。彼（鄭曉）は、「轉藏」と云い、此は「道書」と云う。其の傳會なること明らかなり。序文 蕪陋なれば、亦た修撰の筆に非ざるなり。其の必ず無き者の十なり（『牧齋初學集』卷二十二・雜文二・「致身錄考」）

『致身錄』の出所の記録があいまいである。また序文は稚拙であり、焦竑（字は弱侯、号は澹園。南京旗手衛・江寧の人。嘉靖二十年（一五四一）～萬曆四十五年（一六二〇）。萬曆十七年己丑科（一五八九）の狀元）が書いたものとはとても思えない。

を知らしむ。尙お何ぞ辨ぜんや^①と。明古(史鑑)の論は、殆ど斯の『[致身]録』の爲に發すか。語に之れ有り、「俗語 實ならざるに、流れて丹青と爲る」(『論衡』書虛編)と。余(錢謙益)の是の「[致身録]考」を爲るや、深く夫の史家の察せず、流俗に溺れ、誤りを後世に遺るを懼るなり。余(錢謙益) 豈に辨を好むや(卷二十二・「致身録考」)。

①『西村集』卷六「僧巨然畫趙秉文跋考」に「世の僞りを爲す者は、一に此に至る。然れども亦た幸いにして其れ淺陋不學なり、故に人 みたす 得て之を議す。其の粗く時世の先後にして附會し以て之を實を知らしむ。尙お何ぞ辨ぜんや」。

史彬の末裔の史兆斗が『致身録』にもとづいて新たに『奇忠志』を作り、それに序文を書いた人が、『致身録』とその人が家藏する書物と内容とが一致すると言っている。史兆斗が、錢謙益のところにやってきて、史彬について教えてもらいたいといったので、錢謙益は僞りであるといった。こうしたことはすべて『致身録』から起こっている。そこで、錢謙益は、『致身録』が偽書であることを明らかにするために、この「致身録考」を書いた。つまり、史家が考えもせず、俗流のいうままに、後世に誤りを伝えることを深く畏れているからだ、としめくくるのである。

これ以後、孟森のいうように、『致身録』は、「遂に識者の談ぜざる所と爲る」(「建文遜國事考」(一九八四年中華書局第二次印刷『明清史論著集刊』上冊所収参照)となった。『致身録』では、「史仲彬」とあるのを「史彬」としているのは、よくわからないが、錢謙益の指摘のとおりであろう。

ただ『致身録』は偽書だと断定したものの錢謙益自身、建文帝に同情していたようである。いま検討した「書致身録考後」に、『致身録』からの引用の文だと思われるが建文帝を「帝」としている。また、偽書である理由の第三番目ところに、

『[致身]録』を以て之を考えるに、[史]彬 方に[建文]帝を滇南に訪れんとす。何の暇ありて之に及ばん(『牧齋初學集』卷二十二・雜文二・「致身録考」)。

とある。

帝位を剥奪された人物を引用であれ「帝」としているのは、単に不用意なのだろうか。この文章が収められた『牧齋初學集』は、明が亡びる前年の崇禎十六年（一六四三）九月に門人の瞿式耜によって刻が成っている。錢謙益は六十二歳であった（錢謙益は八十三歳で亡くなっている）。門人が刊行したのであれば、文章の再検討も行なわれたと考えられる。そこでやはり、「帝」を用いているのは、錢謙益の建文帝にたいする気持ちが含まれているかもしれない。

ちなみに、清になって刻された『牧齋有學集』の「建文年譜序」では、建文帝を「讓皇帝」で通している。これは、南明政権が制定した諡号である。清朝が正式に建文帝の諡号を選定するのは、乾隆元年になってからのことである。

(2)

南京に逃れた福王由^{ゆうすう}崧が崇禎十七年（一六四四）五月壬寅（十六日）に即位し（日付は『南渡錄』による）、六月六日に崇禎帝に諡号と廟號がおくられる（崇禎帝の諡号・廟號については、拙稿「明・崇禎帝の諡号について」（1）～（4）：『経済理論』351号～354号参照）。

それと同時に建文帝の父である懿文太子の尊号の復活と靖難の時の諸臣に諡することが提案された。李清（字は心水，号は映碧，晩年は天一居士と号す。揚州興化の人。明・萬曆三十年〔一六〇二〕～清・康熙二十二年〔一六八三〕。崇禎四年辛未科〔一六三一〕三甲一百八十六名の進士）の『南渡錄』は、つぎのようにいう。

〔崇禎十七年（一六四四）六月壬戌（六日）〕懿文太子の故號及び靖難の諸臣の諡を復せんことを議す。

太僕寺少卿の萬元吉（字は吉人・愼餘，号は茹荼・墨山草堂。江西南昌の人。天啓五年乙丑科（一六二五）三甲七十五名の進士）の請に従えり。〔萬〕元吉 言えらく，皇上 孝陵を謁してより，徐むろに懿文太子の園陵の

在る所を問い、親から展拜を爲す。臣 諸臣の後に随い、手額（喜びを示す）せざる莫し。先臣の楊守陳 嘗て『建文實録』を修めんことを請い、「國は廢す可し、史は廢す可からず」と云う。^①弘治（一四六五年～一四八七年）中に布衣の繆恭 闕に伏して上書し、建文の故號を復し、其の後に爵し奉祀せんことを請う。敬皇帝（孝宗弘治帝） 罪すること勿れとす。^②夫れ曲直を滅して載せざるは、其の事を直陳（直言）し、之を示すに以て増加す可きこと無きに若かざるなり。廟號を削りて隆^{とう}ばざるは、景帝の故事を引き、懿文の當日の追尊する故號を還^{かえ}し、之を園寢に祀りて、配するに建文君を以てするに若かざるなり。廷臣に敕して廣く衆議を集めんことを乞う。[そもそも]『建文實録』は何（どのように）開局纂集するを作さんや、懿文の故號・祀典は何（どのように）釐正（改正）を作さんや。[そうするのは]靖難の事に死する諸臣の諡・蔭は尚お闕くればなり。遜國の君臣を羨むこと何ぞ厚きや、[それは]此の時の忠義の多く虧くを愧ずればなり。良に高皇帝（太祖洪武帝）の餘闕（字は廷心、号は天心。安徽廬州の人）を褒め、危素（字は太樸。江西金谿の人）を斥け、風厲（太祖洪武帝の意志） 備え至る。靖難より正氣を以て漸く削らるるを以て、故に今日の獐狷の徒の膝を屈して拜偽を爲すを釀す。請うらくは靖難の事に死する諸臣及び北京と各省の城陷ち難に殉ずるの諸臣を將^もって、諸司に勅して採録に備え歸し、一書を編成し、分ちて二等に列し、酌して諡・蔭・廟祀を予え、學宮に頒行し、廣く激勸（激勵）を示せ。と。……疏 奏され、俱に之を嘉納す（『南渡録』 卷之一・崇禎十七年甲申・「六月壬戌（六日）」条・二十七頁～二十八頁・浙江古籍出版社一九八八年刊）。崇禎十七年（一六四四）六月壬戌（初六日）。

①本稿「(1) ⑤弘治年間」参照（『經濟理論』356号・115頁）。

②本稿「(1) ⑤弘治年間」参照（『經濟理論』356号・116頁～117頁）。

「建文實録」をどのように編纂するか、懿文太子の本来の廟号や祭祀をどのようにするのかを検討してほしい。また、靖難の時に亡くなった諸臣の諡や蔭位

は欠けたままになっている。そこで靖難の時の諸臣と北京や各省で殉難した諸臣とを記録して書物を編纂して、それらを二等に分けて謚・蔭・廟祀をあたえ、学校に頒行して、発奮させることを願いたい、と萬元吉が提案し、それが認められたというのである。

萬元吉の提案については、『國榷』も同様に引用する。ただし日付を六月九日に掛けている。

[崇禎十七六月乙丑(九日)]、監軍江北太僕寺少卿の萬元吉 奏すらく、皇上 孝陵を謁し、懿文太子の陵を問い、親から展拜を爲す。[そこで] 乞うに、懿文の當日の追尊せる故號を還し、之を園陵に祀り、配するに建文帝を以てし、實錄を纂修し、謚を遺忠に贈り、其れ輓近(晩近)の人心に于いて非淺を補救せしめん、と。上 之を是とす(『國榷』卷一百二・六一一四頁・思宗崇禎十七年・「六月乙丑(九日)」条)。

また、日付は記していないが、計六奇の『明季南略』(康熙十年(一六七一)に脱稿)ではより詳しく萬元吉の疏を引用する。

[萬] 元吉 奏して曰く、皇上 ^{まえ}前者に恭しく孝陵を謁し、徐むろに懿文[太子]の園陵の在る所を問い、親から展拜を爲す。臣 諸臣の後に隨い、手額(喜びを示す)せざる莫し。斯の擧は實に三百年來未だ有らざるの盛事と爲すなり。先臣の楊守陳 嘗て『建文實錄』を修めんことを議し、「國は廢す可し、史は廢す可からず」と云う有り。卓なるかな兩語、要言不煩(要約されてくどくどしない)と稱す可し。弘治(一四六五年～一四八七年)中に布衣の繆恭 闕に伏して上書し、建文の時の故號を復し、其の後裔に爵し奉祀せんことを請う。時に[繆] 恭の獄に繋がれしこと以て上(孝宗弘治帝)に聞す。敬皇帝(孝宗弘治帝) 詔して罪すること勿れとす。夫れ曲直を滅して載せざるは、其の往事を直陳し、之を示すに以て増加す可きこと無きに若かざるなり。廟號を削りて隆^{とうと}ばざるは、景帝の故事を引き、懿文[太子]の當日の追尊する故號を還し、之を園寢に祀りて、配するに建文君を以てするに若かざるなり。二事 並びに大典に繋がれば、伏

して皇上に敕もて廷臣に下し、『建文實錄』は何（どのように）開局纂集するを作さんや、懿文の故號・祀典は何（どのように）釐正（改正）するを作さんやを衆議せんことを乞う。若し此の舉 告成すれば、千秋萬世の下、必ず傳えて美談と爲さん。抑そも臣 更に請う者有り。靖難の事に死する諸臣は、恩詔・褒録を蒙るを歷るも、乃ち諡・蔭の諸典は、尚お闕けて待つ有り。遜國の君臣を羨むこと何ぞ厚きや。〔それは〕此の時の節義の多く闕くるを愧ずればなり。良に高皇帝（太祖洪武帝）の首に余闕（字は廷心，号は天心。安徽廬州の人）を褒めて危素（字は太樸。江西金谿の人）を斥く，風勵（太祖洪武帝の意志） 備え至る。靖難以後，正氣 漸く損削に就く，故に今日の獐狽賣國の徒の膝を屈して拜僞す・覲顔（厚顔）に人に見ゆるを爲すを釀すなり。請うらくは，靖難の事に死する諸臣及び北京・各省直城陷ち節に殉ずるの諸臣を將^もて，敕もて諸司に下し，細かく採録に歸し，一事（書）を編成し，分かちて二等に列し，酌して諡・蔭・廟祀を予え，仍お學宮に頒行し，廣く激勸（激勵）を示し，晩近の人心に于いて匪淺を補救するを庶^もう，と（『明季南略』卷二・「累朝闕典未行疏」条）。『南渡錄』によると，六月七日に崇禎帝の諡號が通達されたことに関連して，顧錫疇（字は九疇，号は瑞屏。江蘇崑山の人。萬曆四十七年己未科〔一六一九〕三甲一百二十六名の進士）が，建文帝と景帝に廟号を贈り，靖難の時の諸臣に諡をあたえ，從祀する学者の数を増やすことが提案される。そして從祀のこと以外は認められた。

〔崇禎十七年（一六四四）六月癸亥（七日）〕詔もて〔崇禎帝に〕追尊する諡號を以て中外に播告す。

禮臣の顧錫疇 因りて建文帝の廟號・景帝の廟號を補わんことを請い，并せて靖難の諸臣の諡に及ぶ。又た理學の各臣の先師に從祀する者を増さんことを請う。俱に之に従う。〔しかし〕從祀の一議は終に寢む（『南渡錄』卷之一・崇禎十七年甲申・「六月癸亥（七日）」条・三十葉・浙江古籍出版社一九八八年刊）。

こうして、六月十九日に懿文太子の諡を復活させ、建文帝に「嗣天章道誠懿淵恭親文揚武克仁篤孝讓皇帝」と諡し、廟號を「惠宗」とするように決定したが、それらはすべて顧錫疇が擬定したものであるという。

[崇禎十七年六月] 乙亥（十九日）、懿文太子の諡を復し、「興宗孝康皇帝」と曰う。常妃を「孝康皇后」と曰う。建文君に諡を上つりて、「嗣天章道誠懿淵恭親文揚武克仁篤孝讓皇帝」と曰い、廟號を「惠宗」とす。馬后を「孝愍溫仁貞哲睿肅烈襄天弼聖讓皇后」と曰う。景皇帝の諡を「符天建道恭仁康定隆文布武顯德崇孝景皇帝」と曰い、廟號を「代宗」とす。汪后を「孝淵肅懿貞惠安和」と曰い、天恭聖景皇后に輔す。天下に頒告す。

皆な禮臣の顧錫疇の擬なり。時に并せて建文の年號を復せんことを請い、之を允す。萬曆の時に先に題もて復するを知らず（『南渡錄』卷之一・崇禎十七年甲申・「六月乙亥（十九日）」条・四十三葉～四十四葉・浙江古籍出版社一九八八年刊）。

ここで顧錫疇は「建文」の年号の復活も求めて、それが認められたというのは、萬曆年間に「建文」の年号が復活したのを知らないからだ、と『南渡錄』で李清がコメントする。

『國權』においても、

[崇禎十七年六月乙亥（十九日）] 南京禮部尙書の顧錫疇 奏すらく、恭しく聖母を迎うるに官の禮儀を遣らん、と。又た建文帝・景皇帝の尊諡及び懿文皇太子の舊稱の「興宗孝康皇帝」及び建文の年號を復せんことを請う、と。上（弘光帝）之に従う。[談遷が] 按ずるに萬曆□□建文の年號を復す。顧錫疇 再び請うは、誤りなり（『國權』卷一百二・六一二一頁・思宗崇禎十七年・「六月乙亥（十九日）」条）。

といい、顧錫疇が「建文」の年号の復活を求めているのは誤りであるとする談遷のコメントを附記する。しかし、すでに(1)⑦萬曆年間で検討したように、「建文」の年号は実質的には復活しなかったのである。したがって、ここで顧錫疇がふたたび「建文」の年号の復活を求めているのは、当然の要求であった。

この顧錫疇の提案は、屈大均（原名は紹隆、或いは邵龍、字は翁山、一字は冷君。明季の諸生）の「大行廟號攷」に詳しく引用されている。

それによると、崇禎十七年六月に禮部尚書となった顧錫疇は崇禎帝の廟号の制定を願ひ出た。その結果、高弘圖の撰定した「思宗烈皇帝」となった。それに加えて、建文帝の年号を復活させ、建文帝とその皇后に諡号を贈り、そして景皇帝とその皇后にも諡号を贈るよう申し出た。

崇禎十七年六月、顧錫疇 禮部尚書と爲りて首に大行（崇禎帝）の廟號を更定するを請う。是の時大學士の高弘圖 恭しく擬して「思」と曰い、[顧]錫疇は「乾」と曰い、「禮」と曰い、又た「正」と曰う。奉^うけたる旨もて大行皇帝（崇禎帝）の諡を「思宗烈皇帝」と曰う。[顧]錫疇 又た建文君の年號を復し、仍お皇帝・皇后の諡號を追上し、及び景皇帝・景皇后の諡號を追上せんことを請う（『翁山文外』卷十三・「大行廟號攷」）。

そして、「建文」の年号を復活し、「實錄」は「建文」の年号に従ったものにもどして「惇史」としてほしい。また建文帝の諡は「嗣天章道誠懿淵恭覲文揚武克純^{ママ}（仁）篤孝讓皇帝」、廟號を「惠宗」とし、建文皇后は「孝愍溫貞哲睿肅烈襄天弼聖讓皇后」としてもらいたい。景帝は、「符天建道恭仁康定隆文布武顯德崇孝景皇帝」と諡を増加し、廟號は「代宗」とし、景皇后は、「孝淵肅懿貞惠安和輔天恭聖景皇后」と増加した諡としてほしい、という。さらに建文帝の母呂氏は「太后」といわれているが諡号はないので、諡号を贈ってもらいたい、ともいう。

[顧錫疇は、以下のように] 謂う。洪武三十二年は、乃ち建文の改元の歳にして、洪武三十五年に至る凡そ四年は、皆な建文の年號なり。乞う史臣に敕して洪武三十二年より洪武三十五年に至るまでを以て、仍お「建文」と爲せ。「實錄」は、其の編年の紀月を悉く改正して初めの如くし、一代の惇史^①と爲さんことを庶う。[そして] 諡號を追上すれば、則ち恭しく建文君に擬するに、尊諡を「嗣天章道誠懿淵恭覲文揚武克純^{ママ}（仁）篤孝讓皇帝」、廟號を「惠宗」とす。建文の皇后の諡を「孝愍溫貞哲睿肅烈襄天弼聖讓皇

后」と曰う。景皇帝の尊諡は、原諡の「恭仁康定」四字の上下に十二字を増崇して、「符天建道恭仁康定隆文布武顯德崇孝景皇帝」と曰い、廟號は「代宗」とす。景皇后の尊諡は、原諡の「貞惠安和」四字の上下に八字を増して、「孝淵肅懿貞惠安和輔天恭聖景皇后」と曰う、と。又た謂う、懿文皇太子・懿文皇太子妃は、建文元年二月に當りて、已に皇考の懿文皇太子を追尊して「興宗孝康皇帝」と爲し、皇妣の懿文皇太子妃を「孝康皇后」と爲す。尊母の皇太子妃呂氏を太后と爲すも、今未だ尊諡號あらず。尚お追崇を爲せば、則ち已に尊者は、必ず宜しく光復すべし。乞う並びに敕して史臣に下し諡號を追復せんことを、と（『翁山文外』卷十三・「大行廟號攷」）。

① 『禮記』内則に「皆な悼史有り」とある鄭注に「悼史は史の悼厚なる者なり」。

この結果、すべて認められ、六月二十八日に崇禎帝とその皇后の諡号が、七月三日に建文帝や景帝などの諡号が發布されたという。⁽²⁾

(2) 屈大均の「大行廟號攷」とおなじく徐鼎（字は彝舟，号は亦才。江蘇六合の人。嘉慶十五年（一八一〇）～同治元年（一八六二）。道光二十五年乙巳恩科（一八四五）三甲六十六名の進士）の『小腆紀年附考』（咸豐十一年〔一八六一〕成る）も七月三日に諡号が發布されたという。

[順治元年（崇禎十七年）秋七月戊子（三日）] 明 懿文太子・建文帝・景帝の諡號を追上す。

懿文皇太子の廟を追復し、諡して「興宗孝康皇帝」と曰い、[懿文太子の] 妃常氏を「孝康皇后」と曰う。建文帝の諡を追上して「嗣天章道誠懿淵恭親文揚武克純（仁）篤孝讓皇帝」と曰い、廟號を「惠宗」とす。[建文帝の] 后馬氏を「孝愍溫貞哲睿肅烈襄天弼聖讓皇后」と曰う。恭仁康定景皇帝の諡を追復して「符天建道恭仁康定隆文布武顯德崇孝景皇帝」と曰い、廟號は「代宗」とす。貞惠安和景皇后汪氏を「孝淵肅懿貞惠安和輔天恭聖景皇后」と曰う。

徐鼎 曰く、廟諡の舊典を按ずるに「代宗」は即ち「世宗」なり。明に「世宗（嘉靖帝）」有り。而して景帝の諡を「代宗」と曰うは、重出にあらざるや。顧炎武

曰く、「南京 新たに立ち、邦典 繁多なり。禮部尚書の顧錫疇 素より古を考えず、一切の諡號は其の門人の謝復元の撰定に聴く。不學の宗伯（禮部尚書）を以て、巷の小夫に任委す。諡冊 一たび頒たれ、天下 用て譏笑を爲す」と（『亭林餘集』「廟號議」）。閻若璩 嘗て私かに之を遣臣の李清に質す。[すると] 答語

[顧] 炎武の説と同じ、と（『潛邱劄記』卷六・「又與陶紫司書」）。之を附志し、禮を議する者に告ぐ（『小腆紀年附考』卷第七・「崇禎十七年七月戊子（三日）」条）。

奉けたる旨もて悉く擬の如くす。是に於いて三詔 並びに頒たる。本月二十八日に「思宗烈皇帝・孝節烈皇后」の詔文一道を頒し、七月三日に「興宗孝康皇帝・孝康皇后・惠宗讓皇帝・孝愍讓皇后・代宗景皇帝・孝淵景皇后」の詔文一道を頒す（『翁山文外』卷十三・「大行廟號攷」）。

この決定がなされると、「朝野 歡慶し、以て此れ國家の盛典と爲す」となった。新天子が即位してすぐにこのことを行なったことは、明朝の先祖畫が遺憾に思っていたことを晴らし、建文帝・后と景帝・後の気持ちを慰めたことである。これこそ中興の一大転機となるものである。このような提案を行なった顧錫疇は賢者の禮部尚書である、となったと屈大均はいう。

是に於いて朝野 歡慶し、以て此れ國家の盛典と爲す。新天子 即位して甫めて一月にして、即ち盡く舉行す。二百五十餘年の典禮をして一朝に明らかに備えしむ。以て二祖列宗の憾を遺す無く、兩朝の帝後の在天の靈を慰む。斯れ誠に中興の一大機括なり。之を發するは乃ち〔顧〕錫疇よりす、賢なる秩宗（禮部）と謂う可きなり（『翁山文外』卷十三・「大行廟號攷」⁽³⁾）。

『南渡錄』によると、この後、九月十五日に靖難で殉節した諸臣に諡を贈り、祭祀することが決まる。

〔崇禎十七年九月庚子（十五日）〕建文の節に死せる諸臣に追補して諡を贈り、廟を京師に立て、春秋に祭祀す（『南渡錄』卷之三・崇禎十七年甲申・「崇禎十七年九月庚子（十五日）」条・一一〇葉・浙江古籍出版社一九八八年刊）。

なお、徐鼐（字は彝舟、号は亦才。江蘇六合の人。嘉慶十五年（一八一〇）～同治元年（一八六二）。道光二十五年乙巳恩科（一八四五）三甲六十六名の進士）の『小腆紀年附考』（咸豐十一年〔一八六一〕成る）は、十二日に掛けて、この諡を贈ったことを記録して、つぎのような意見を付けている。

〔崇禎十七年九月丁酉（十二日）〕明 開國の功臣・靖難の節に死す・武〔宗〕・熹〔宗〕兩朝の忠諫の諸臣に追賜して諡を封ず。

徐鼎 曰く、何を以て書す。譏ればなり。然らば則ち諡を封ずるは未だ
 當ならざるか。是れ皆な二百年來 宜しく褒卹を昭雪する所の者なり。

[それでは] 何を以て譏らん。梓宮 藁葬され、宗社 陸沈し、臥薪嘗
 膽の秋なり。豈に太平の事を潤色せんや、と(『小腆紀年附考』巻第八・
 「崇禎十七年九月丁酉(十二日)」条)。

徐鼎は、これまで諡を贈られなかった諸臣にあたえたのは問題ではないという。
 ただ国家が危急存亡の時に、太平の世に行なう行事をしているのを譏るために、
 この記事を載せたというのである。

そして、十月十九日には、建文帝の皇太子の文奎に「恭愍」と諡し、その弟

✓ (3) 顧錫疇は、「建文」の年号を復活と建文帝・皇后と景帝・皇后に諡を贈ることを求めた。

また、靖難の忠臣である方孝儒などに諡を贈ることも提案し、認められたと、屈大均はいう。

屈大均 曰く、予 嘗て顧公錫疇に建文君の年號を復し、皇帝・皇后の諡號・景皇帝・
 景皇后の諡號を追上せんことを請う有るを見る。又た〔顧錫疇には〕靖難の忠臣の方
 孝儒等を追諡するの疏有り。〔そして〕皆な擬の如きを蒙る(『皇明四朝成仁錄』巻六・
 常州死節臣傳・「常州死節臣曰管紹寧」条)。

そして、その奏疏にはつぎのようにあったという。

其の兩朝(建文・景泰)の諡號を擬するに〔以下のように〕曰う有り。洪武三十二年
 は、乃ち建文の改元の歲にして、洪武三十五年に至る凡そ四年は、皆な建文の年號に
 屬す。乞う皇上 敕を史臣に下して改正し、洪武三十二年より洪武三十五年に至るま
 でを仍お「建文實錄」と爲し、其の編年紀月は、悉く改正して初めの如くし、萬世の
 悼史(『禮記』内則)と爲さんことを庶う。諡號を追上するに至れば、臣 恭しく建
 文君の尊諡を擬するに「嗣天章道誠懿淵恭觀文揚武克仁篤孝讓皇帝」と曰い、廟號を
 「惠宗」とせん。恭しく建文の後の尊諡を擬するに「孝愍溫貞哲睿肅烈襄天弼聖讓皇后」
 と曰う。恭しく景皇帝の尊諡を擬するに、原諡の「恭仁康定」四字の上下に十二字を
 増崇して、「符天道建恭仁康定隆文布武顯德崇孝景皇帝」と曰い、廟號は「代宗」とす。
 恭しく景皇后の尊諡を擬するに、原諡の「貞惠安和」四字の上下に八字を増崇して、「孝
 淵肅懿貞惠安和輔天恭聖景皇后」と曰う。又た按ずるに、建文元年二月に、皇考の懿
 文皇太子を追尊して「興宗孝康皇帝」と爲し、皇妣の懿文皇太子妃を「孝康皇后」と
 爲す。尊母皇太子妃呂氏を太后と爲す。伏して乞う敕を史館に下し、並びに即ち舊號
 を追復せんことを。普天の率土をして咸な皇上の一月の間に於いて悉く盛事を擧ぐる
 を知らしめん。本朝をして三百年來 一つの缺典無からしめん。亦た二祖〔列〕宗の
 在天の靈 實に式て之に憑く者なり。崇禎十七年六月十九日。奉けたる旨もて擬する
 が如し、と。此の典禮の奏疏は家に藏す。管公(管紹寧)と同じく定むる所の者なり(『皇
 明四朝成仁錄』巻六・常州死節臣傳・「常州死節臣曰管紹寧」条)。

の允燧に「悼」と、允燧に「愍」と諡した。允燧はももとの「愍」の諡を復活し、允燧は諡の「哀簡」を改めて「哀」とした。諸々の駙馬は旧号にもどし、文圭に懷」と諡したという。

〔崇禎十七年十月癸酉(十九日)〕宣廟(宣宗洪熙帝)の吳賢妃の尊號を復し、諡を上つて「孝翼溫惠淑慎慈仁匡天賜聖皇太后」と曰う。建文の故太子の文奎に諡して「恭愍」と曰う。皇弟の允燧吳王に「悼」と諡し、允燧衡王に「愍」と諡するを復す。允燧徐王は諡の「哀簡」を改めて「哀」と曰う。諸公主の駙馬は、皆な舊號を復し、皇少子の文圭原王に追封して「懷」と諡す(『南渡錄』卷之三・崇禎十七年甲申・崇禎十七年十月癸酉(十九日)条・一三七葉・浙江古籍出版社一九八八年刊)。

崇禎十七年十二月六日になると、建文帝の諸臣には諡号をあたえるだけで、蔭位は認めないとした。乱発されるおそれがあるためであるからだとする。偽書『致身錄』や偽書『從亡日記』に記されるいかがわしい人物の自称末裔が大量に出現したためなのだろうか。

〔崇禎十七年十二月庚申〕(六日) 命じて建文の諸臣は止だ諡を予贈するのみ。蔭を乞うを得ず。幸濫の滋きを以てなり(『南渡錄』卷之四・崇禎十七年甲申・「崇禎十七年十二月庚申(六日)」条・一六七葉・浙江古籍出版社一九八八年刊)。

ただし、建文帝にきわめて忠であったと認められる人物には蔭位をあたえたようである。崇禎十七年十二月十三日に、方孝儒の子孫の方樹節を翰林院五経博士とした。また、建文帝に忠であった景清についての蔭位の適用を会議したという。

〔崇禎十七年十二月丁卯(十三日)〕蔭もて方孝儒の裔の樹節を翰林院五経博士とす。景清 蔭を酌議(斟酌)す。

〔景〕清は、建文に忠なりと雖も、然れども刃を挟みて蹕を犯し、罪を文皇(永樂帝)に得るの故なりと言う(『南渡錄』卷之四・崇禎十七年甲申・「崇禎十七年十二月丁卯(十三日)」条・二一五葉・浙江古籍出版

社一九八八年刊)。

ちなみに李清は、建文帝が亡くなってから、永樂帝を亡き者にするために仕えたが、発覚し磔刑に処せられ、一族もそれに続いたという人物である。

管見のおよぶところでは、建文帝に関した記事は、これ以後見当たらない。建文帝について議論が始まるのは、つぎの清代になってからである。

さて、南明政権において、建文帝の諡号・廟号を定めた崇禎十七年六月十九日以後のことだと思われるが、顧炎武(字は寧人、初名は絳、後に炎武に改める。亭林先生と称される。江蘇崑山の人。明・萬曆四十一年〔一六一三〕～清・康熙二十一年〔一六八二])が、次のような意見書を書いている。

臣(顧炎武)之を聞くに「禮」に曰く「祖に功有り、宗に徳有り」(『史記』孝文本紀/『漢書』景帝紀)と。昔、商の時に在りて、賢聖の君六七作^{おこ}りて「宗」と稱する者は三、太宗・中宗・高宗なるのみ。漢室の興りて、文を太宗と曰い、武を世宗と曰い、宣を中宗と曰う。惠・景・昭の三帝は皆な「宗」と稱せず。是れ「帝」は以て君人(國君)の統に繋ぎ、「宗」は以て前人の徳を表するを知る。是^こを以て「帝」は桃(先祖と一緒に合祀)し、「宗」は桃せず。此れ「仁の至り、義の盡くせる」(『禮記』郊特性)なり。本朝(明朝)は唐・宋の制に循い、二祖以下の列聖は、「宗」を稱せざるは無し。建文君及び景皇帝^①(景泰帝/景帝)の若きは、皆な帝位を履みて終わらず、故に〔第九代皇帝〕憲宗(成化帝)の郕戾王(景泰帝/景帝)に追諡するや、「恭仁康定景皇帝」と曰う。夫れ「帝」と稱し以て其の仁を致すも、「宗」

(4) 張穆の『顧亭林先生年譜』によると、崇禎十七年に、顧炎武は、兵部司務に任命される。崑山の令の楊君永言 南都の詔に應じて先生(顧炎武)の名を行朝に列薦し、詔もて用いて兵部司務と爲す(『顧亭林先生年譜』卷一・「崇禎十七年甲申」条)。

翌年の「順治二年乙酉」条に、

春、楊永言の薦^うを膺け、京口に至る。四月、從叔父の穆庵(顧蘭服)と偕に南京に赴く。朝天宮に寓す。因りて先の兵部侍郎公の祠を拜す。祠を拜し畢り、即ち語廉涇に歸る(『顧亭林先生年譜』卷一・「順治二年乙酉」条)。

とあり。四月に南京に行ったもののすぐに語廉涇に帰ったようである。なお、五月十五日に清の多鐸が南京に入城している。

と稱し以て其の義を致さず、萬世の下、復た議す可き者無し（『亭林餘集』・「廟號議」）。

①兄の第六代皇帝の英宗が土木の変で捕虜になったため、第七代皇帝となる。英宗が帰還して、対立する。景泰八年（一四五七）または天順元年（一四五七）に景帝は重病となり、第八代皇帝として英宗は復位する。そしてまもなく景帝は歿する。

「祖」がつけられる者には功績があり、「宗」がつけられる者には徳があるという。漢代までの例からすると、「帝」とつくるのは帝位を受け継いだことを示し、「宗」をつけるのは徳があったことを表わす。しかし、明朝は唐朝・宋朝の例に倣い、太祖・成祖以下の皇帝に「宗」をつける。ただし、建文帝と景泰帝（景帝）とはそれぞれの理由から例外であるというのである。

そして、顧炎武は、南明政権が、建文帝に「嗣天章道誠懿淵恭親文揚武克仁篤孝讓皇帝」と諡し、廟號を「惠宗」としたことを批判する。「惠宗」は、元の最後の皇帝につけられたものなので、不適切である。しかも必ず「宗」をつけなければならないということはないというのである。

惟だ建文君 未だ追諡されず、二百年以來の臣子の情の遺惻（餘痛）有るなり。而して南渡の初め乃ち建文君の諡を追上して「嗣天章道誠懿淵恭親文揚武克仁篤孝讓皇帝」、廟號を「惠宗」と曰う。……[この建文帝の廟號の]「惠宗」二字は、元人の其の末帝に號する所以の者なり。⁽⁵⁾之を建文君に加うるは、亦た未だ協わざる似たり。臣（顧炎武） 廷臣に勅して會議するを請う。……建文君は別に尊諡を上つる可し。皆な必ずしも「宗」と稱せず。若し尊號を除去するを以て嫌と爲せば、則ち古の人に之を行なう者有⁽⁶⁾り……今、若し二帝（建文君と景泰帝 / 景帝）の「宗」と稱するを裁ちて、二祖の「宗」に列するに嚴なるを致せば、此れ則ち文質の中に酌し、「親

(5) 王世貞の『弇州四部稿』には、つぎのようにいう。

洪武元年、大將軍徐達・副將軍常遇春 兵二十五萬もて北伐し、京師に至る。元主門を開きて北遁す。應昌 [に逃れた] 二年 [日（一三七〇年）] に至り殂す。其の國人 諡して「惠宗」と曰う。而して高皇帝 嘉其能達變推分遣使祭而之を尊びて「順帝」と曰う（『弇州四部稿』卷八十・文部・志五首・「北邊始末志」条）。

を親しむの殺（親族を親しむにも、その親疎の度により、その親しみを少しずつ減ずる）」（『中庸』第二十章・第五節）を體する者なり。亦た何ぞ嫌わん……（『亭林餘集』・「廟號議」）。

このように顧炎武は、建文帝に同情をする。しかし、明における他の皇帝たちとの兼ね合いを考えれば、「宗」をつけるのは問題がある、と考える。

そもそも、建文帝に贈られた諡の「嗣天章道誠懿淵恭覲文揚武克仁篤孝讓皇

- ✓（6）顧炎武は、以下のような例を挙げている。まず、前漢については、つぎのようにいう。
漢の王莽 [以下のように] 上つる。元帝の廟號を「高宗」と曰い、成帝の廟號を「統宗」と曰い、平帝の廟號を「元宗」と曰う。[しかし] 建武 [年間] 中に皆な之を去る（『亭林餘集』・「廟號議」）。

後漢については、つぎのようにいう。

後漢の和帝の廟號は「穆宗」、安帝の廟號は「恭宗」、順帝の廟號は「敬宗」、恒帝の廟號は「威宗」とするも、初平元年（一九〇）に有司 奏して「四帝（和帝・安帝・順帝・恒帝）に功徳無し。宜しく「宗」と稱すべからず。尊號を除かんことを請う」と。制して曰く「可」と（『亭林餘集』・「廟號議」）。

唐については、つぎのようにいう。

唐の高宗の太子弘は「孝敬皇帝」と追諡し、廟號は「義宗」とす。開元六年（七一八）に有司 上言し「禮に準るに合に「宗」と稱すべからず」と。是に於いて「義宗」の號を停む。當時の人 未だ之を非とする者有らざるなり。又た『唐書』を按ずるに德宗 初めて立つ。禮儀使・吏部尚書の顔真卿 上言するに「上元中、政は宮壺に在りて、始めて祖宗の諡を増す。玄宗の末、姦臣 命を竊みて、列聖の諡に加えて十一字に至る者有り。按ずるに周の文 [王]・武 [王] は、「文」と言いて「武」と稱せず・「武」と言いて「文」と稱せず。豈に盛徳の優れざる所ならんや。蓋し其の至れる者を稱するの故なり。故に諡は、褒を爲さざること多く、貶を爲さざること少なし。今、列聖の諡號は太はだ廣く、古制を踰えること有り。[そこで以下のように] 請う。中宗より以上は皆な初めの諡に従い、睿宗を「聖真皇帝」と曰い、玄宗を「孝明皇帝」と曰い、肅宗を「孝宣皇帝」と曰わん。以て文を省きて質を尚^{とう}とび、名を正しくして本を尊^{とう}とぶ」と。上（德宗） 百官に命じて集議さす。儒學の士は皆な [顔] 真卿の議に従う。獨り兵部侍郎の袁傒 官は兵 [部侍郎] を以て進み奏言するに「陵廟の玉冊木主は皆な已に刊勒さる。輕がるしく改むる可からず」と。事 遂に寢む。陵中の玉冊の刻する所が乃ち初めの諡なるかを知らざるなり。史家の言 亦た真卿を以て是と爲す（『亭林餘集』・「廟號議」）。

①『舊唐書』德宗本紀上に「[大曆十四年（七七九年）] 七月戊辰朔、日 之を蝕する有り。禮儀使・吏部尚書の顔真卿 奏するく、列聖の諡號は、文字繁多なれば、初めの諡を以て定と爲さんことを請う、と。兵部侍郎の袁傒 議して云う、陵廟玉冊 已に刻さる。輕がるしく改むる可からず、と。罷む。[しかし、袁] 傒は妄りに奏するなり。玉冊は皆な初めの諡を刻するのみなるを知らず」。

帝」であるが、王弘撰（字は無異，又の字は文修，号は山史，又の号は待庵。陝西華陰の人。明・天啓二年〔一六二二〕～清・康熙四十一年〔一七〇二〕）の『山志』によると、

帝王の諡有るや、古は或いは一字を用い、或いは二字を用う。今の制は、帝の諡は一字なり、而して上に更に十六字を用う……（『山志』初集卷四・「諡法」条）。

とある。

さらに、査繼佐（字は伊璜，号は東山。浙江海寧の人。明・萬曆康熙六十一・二十九年〔一六〇一〕～清・康熙十六年〔一六七七〕）の『罪惟録』によると、初め定制、皇帝の崩じ、諡を工するに、率ね十六字、摠ぶるに一字を以てす。皇后は十二字を用い、帝の諡の統ぶるに一字を以てするに従う。後、嘉靖中に改めて高皇帝に二十一字・皇后に十五字を加う（『罪惟録』卷之七・志・諡典）。

という。つまり、明朝において、皇帝に贈られた十七字の諡号のうち、最後の一字が十六字を統べる本来の諡であり、そのうえの十六字は、増加された諡（尊号）ということになる。建文帝の場合、「嗣天章道誠懿淵恭覲文揚武克仁篤孝」までが尊号であり、「讓」が本来の諡となる。

では、尊号の「嗣天章道誠懿淵恭覲文揚武克仁篤孝」であるが、これらはどのような出典をふまえて撰せられたのだろうか。浅学の私が調べてみたところ、次のようなものではないかと考える。

嗣天は、『書經』周書・立政に、

周公 若（したが）いて曰く、拜手稽首して、嗣天子に告ぐ。王たり（周公若曰、拜手稽首、告嗣天子王）。

とあるのを踏まえる。

章道は、よくわからないが、『管子』宙合に、

湯武 以て治まり昌なり、道を章かにし以て教え、法を明らかにし以て期す。民の善に興るや此の如し。湯武の功 是れなり（湯武以治昌、章道以

教，明法以期，民之興善也如此，湯武之功是也)。

などの用例がある。

誠懿もよくわからない。管見のおよぶところの初期の用例は、長慶二年(八二二)十二月七日に、敬宗が皇太子に立てられた時の詔(宋・宋敏求『唐大詔令集』卷二十七・「皇太子立太子」条所引の「立景王爲皇太子詔」や、唐・裴度(字は中立。山西聞喜の人。永泰元年〔七六四〕～開成四年〔八三九〕)の「蜀相丞諸葛武侯祠堂碑銘并序」などに見える。

淵恭もよくわからない。管見のおよぶところの最も早い用例は、『太玄經』に見えるものがある。

觀文・揚武は、『書經』周書・立政に、

今，文子文孫の孺子 王たり。其れ庶獄に誤る勿れ。惟れ有司の牧夫。其れ克く爾の戎兵を誥め、以て禹の迹に陟り、天下に方行し、海表に至れば、服せざること有るなく、以て文王の耿光^{しめ}を覲し、以て武王の大烈を揚げよ(今文子文孫孺子王矣。其勿誤于庶獄。惟有司之牧夫。其克誥爾戎兵、以陟禹之迹、方行天下、至海表、罔有不服、以覲文王之耿光し、以揚武王之大烈)。

とあるのを踏まえる。

克仁は、『書經』商書・仲虺之誥に、

克く寛に克く仁に、信を兆民に彰かにす(克寛克仁、彰信兆民)。

とあるのを踏まえる。

篤孝は、用例がいろいろある。古い用例としては、

『韓詩外傳』卷九に「是を以君子入則篤孝(是以君子入則篤孝)」、

『孔子家語』卷九・七十二弟子解に「高柴……人と爲り篤孝にして法正有り」。

『後漢書』蔡邕傳に「[蔡]邕 性篤孝なり」。

などがある。近世にはよく用いられる。皇帝に用いた用例としては、『宋史』英宗本紀に「帝(英宗) 天性篤孝にして讀書を好む」とある。

すると、天子の位を継いで、道を明らかにし、誠実な美德をもち、きわめて

恭順であり、周の文王の輝かしさを示し、周の武王のいさおしを発揮し、よく寛大で孝に篤い人物であった、といたかったのであろうか。

十六字を統べる本来の諡号である「讓」字については、『通志』諡略で、「上諡法」の百三十一字の一字に分類され、

右、百三十一の諡は、之を君親に用う・之を君子に用う『通志』（卷四十六・諡略第一・諡中）。

とされる。君主や君子に用いる文字であるという。

また、蘇洵「諡法」卷三には、

功を^{ゆず}推りて善を尚ぶを讓と曰う（推功尚善曰讓）（「諡法」卷三）。

『續通志』諡略中は、

功を^{ゆず}推りて善を尚ぶを讓と曰う（推功尚善曰讓）

唐・睿宗の長子寧王憲「讓皇帝」と諡さる。攷うるに王莽 王根に諡して「直道讓公」と爲す。則ち「讓」と諡さるる者は〔王〕莽の僞諡に始まる（『續通志』諡略中）。

といい、「讓」字は、王莽に始まるという。

「直道讓公」と諡された王根は、『漢書』王莽傳下によると、

眞道侯王涉を以て衛將軍と爲す。〔王〕涉は、曲陽侯〔王〕根の子なり。〔王〕成帝の世に大司馬と爲り、〔王〕莽を薦して自ら代わる。〔そのため、王〕莽之を恩とす。以て「曲陽」は令稱に非ずと爲し、乃ち〔王〕根に追諡して「直道讓公」と曰う。〔王〕涉に其の爵を嗣がす（『漢書』王莽傳下）。

とある。王根は王莽に大司馬の地位を讓った人物であった。

また唐朝が、没後に「讓皇帝」と追諡した睿宗の子の寧王については、『舊唐書』本紀第九・玄宗下に、

〔開元二十九年（七四一）十一月〕辛未、太尉寧王憲 薨ず。諡して讓皇帝と爲し、惠陵に葬る（『舊唐書』卷九・本紀第九・玄宗下）。

といい、『舊唐書』卷九十五・列傳四十五・睿宗諸子に、

讓皇帝憲、本名成器、睿宗の長子なり。……按ずるに諡法に「功を^{ゆず}推りて

善を尚ぶを讓と曰う（推功尚善曰讓）」・「徳性 寛柔なるを讓と曰う（徳性寛柔曰讓）」、敬して追諡して「讓皇帝」と曰う（『舊唐書』卷九十五・列傳四十五・睿宗諸子）。

とある。

つまり、『舊唐書』によると、寧王は、睿宗の長子で、玄宗の兄にあたる。睿宗が最初に即位した文明元年（六八四）に六歳で皇太子に立てられる。睿宗の退位とともに格下げされ、睿宗が踐祚するにあたって、嫡子の長男であるにもかかわらず、皇太子の地位を弟の玄宗に讓る。そして亡くなってから「讓皇帝」と諡号を贈られるという人物であった。

さらに、『新五代史』卷六十二・南唐世家第二によると、呉の齊王の徐知誥（後、南唐の李昇）が、呉王の楊溥から讓位された時に、楊溥に「高尚思玄弘古讓皇帝」を贈っている。

このように「讓」には、功績をゆずって善をとうとぶとか、徳性がおだやかであるという意味がある。また、「讓」字が贈られた人たちを見ると、状況はそれぞれであるが、自分の地位を他人にゆずった人に与えられている文字であるといえる。

ここで十六字を統べる本来の諡号として、「讓」字が用いられたというのは、いまのような用例をふまえて、永樂帝に帝位を渡したことをあらわしているのであろうか。

では、廟号の「惠」字はどうであろうか。「惠」字は、諡法（『史記』正義所引による）には、

柔質（寛柔の質）もて民を慈しむを惠と曰う（柔質慈民曰惠）。

民を愛して與うるを好むを惠と曰う（愛民好與曰惠）。

とある。

『逸周書』諡法解の「柔質慈民曰惠・愛民好與曰惠」条に、朱右曾は、『逸周書集訓校釋』（道光二十六年〔一八四六〕序）において、

「柔質」は、寛柔の質なり。「與」は、施予なり。『孟子』に曰く「惠に

して政^{まつりごと}を為すを知らず」と。又た『孟子』滕文公上] 曰く「人に分か
つに財を以てする、之を恵と謂う」と(『逸周書集訓校釋』卷六・諡法弟
五十四・「柔質慈民曰恵 / 愛民好與曰恵」条)。

と注している。

また、陳逢衡の『逸周書補注』(道光五年〔一八二五〕刊)は、「柔質^{ママ}受諫(慈
民)曰恵」のみを引き、注釈を加える。

柔質受諫曰恵「恵」は盧本「慧」に作る

孔[晁]注：虚を以て人を受く。

補注：周王涼「恵王」と諡さる。案ずるに『爾雅』釋言に「恵は、順なり」
と。故に柔質にして能く諫を受ける者を恵と曰う(『逸周書補注』卷
十四・二十六葉～二十七葉・「柔質受諫曰恵」条)。

『唐會要』卷七十九の「諡法上」条には、

慈仁にして與うるを好むを恵と曰う(慈仁好與曰恵)。

柔質(寛柔の質)もて慈仁なるを恵と曰う(柔質慈仁曰恵)。

柔質(寛柔の質)もて諫を受けるを恵と曰う(柔質受諫曰恵)。

とある。

さらにいうと、「恵」字は、『通志』諡略で、「上諡法」の百三十一字の一字
に分類され、

右、百三十一の諡は、之を君親に用う・之を君子に用う『通志』(卷
四十六・諡略第一・諡中)。

とされる。君主や君子に用いる文字であるという。

蘇洵の「諡法」では、

民を愛して與うるを好むを恵と曰う(愛民好與曰恵)

孔子 子産を以て恵人と為す(『論語』憲問に「或るひと子産を問う。
子 曰く、恵人なり」と。)。而して孟子は亦た其の「恵^{まつりごと}にして政^{まつりごと}を為
すを知らず」と譏る(離婁下)。然らば則ち恵とは愛を人に結び、禮を
知らざる者なり(「諡法」卷三)。

といい、これまでと異なった解釈をください。

すると、「恵」字は、民を愛してあたえることを好む、寛柔の質をもって民を慈しむ、寛柔の質をもち諫めを受け入れた、という意味となる。蘇洵の「諡法」によれば、「愛を人に結び、禮を知らざる者」を意味するという否定的な意味を含んだ諡号となる。

また、建文帝以前に「恵宗」の廟号が贈られたのは、管見のおよぶところつぎの三人である。

◎呉の齊王の徐知誥（南唐の李昇）が、祖父の李志の廟号を「恵宗」とした（『新五代史』卷六十二・南唐世家第二による）。

◎景宗李元昊から数えて三代目になる李秉常が「康靖皇帝」と諡を、「恵宗」と廟号を贈られている（『宋史』卷四百八十六・列傳第二百四十五・外國二・夏國二による）。

◎元の順帝に群臣が廟號を「恵宗」と贈る。國語で「烏哈圖汗」という。明太祖は「順帝」と諡する（注5参照）。

このうち特に問題となるのは、顧炎武が指摘したように、「恵」字は、元の順帝に臣下のものが贈った廟号であるということである。元の順帝は、明の太祖洪武帝によって大都（北京）を追放された皇帝である。

このように、「讓」字には人に功績をゆずる意味も含まれ、実際に自分の地位を他人に讓った人に「讓」字が贈られている。また、「恵」字には、「恵にまつりごとして政を為すを知らず」と譏る意味が含まれ、元の順帝と同じ廟号であった。すると、建文帝を否定的に評価しようとした諡号と廟号であったとも理解できる。

（つづく）